

詩編 78：1～8

コリントの信徒への手紙一 15：3～11

「神の恵みを語り継ぐ」

<信仰継承>

今日は、都城城南教会と宮崎中部教会との講壇交換ということで、このように皆さまとご一緒に御言葉に聞くことができますことを、感謝いたします。

今回は、それぞれの教会の「年間聖句」を元に、御言葉を聞きましょう、ということになりました。

都城城南教会の2024年度の年間主題は、「信仰継承～伝道への献身～」。

そして定められた聖書箇所は、先ほど読まれました、詩編 78：4 です。「子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう／主への賛美、主の御力を／主が成し遂げられた驚くべき御業を。」

信仰を伝える。信仰を語り継ぐ。これは、わたしたち教会の、大きな使命です。

まあ「使命」というと、やらなければならないこと、行うべきこと、という感じで、だいぶ重たく、プレッシャーを感じます。それなのに、中々信仰が伝わらない、教会に来る人が少ないと、もどかしさや、困難さや、無力感を覚えることも、多いかも知れません。

でも本当は、「信仰」というのは、それがなければ、わたしたちが生きることが出来なかったもの。それがなければ、倒れたまま、起き上がれなくなっていたもの。それがなければ、道に迷って、行き先も分からなくなり、人生がとんでもないことになっていたかもしれないもの。それが「信仰」ではなかったのでしょうか。

そして、このわたしを今、ここで、生かしているもの。立たせているもの。存在せしめているもの。それが、信仰だとするならば。それは他の人にとっても、必要火急のもの、なのではないのでしょうか。

目の前の人が飢えて死にそうになっている。だったら、ここに行ったら、パンをもらえますよ。しかも、めちゃくちゃ美味しいパンですよ、ということをして、わたしたちは一刻も早く教えてあげたいはずですし、飢えている人は、一刻も早くもらいに行くべきです。

でも、もしかしたら、目の前の人、自分が飢えていることにさえ、気付いていないかも知れません。多くの場合は、そうなのかも知れません。見た目は楽しそうに、幸せそうにしているのに、実はどんどん痩せ細っていつている。

その危険と、そこから脱出して生きる道を。すでに助けられ、パンをもらって生きているわたしたちは、早く知らせなければならないのではないのでしょうか。

アメリカ長老教会の『みんなのカテキズム』という本がありますが、その中では、教会の使命のことを、このように教えているところがあります。

「教会としてのわたしたちの使命は、神の永遠の愛を宣言することによって、絶望している世界へ希望をもたらすことです。それはちょうど、一人の物乞いがもう一人に、パンはどこで見つかるかを伝えるようなものです。」

まさに、伝道のことを語っているところと言えます。注目したいのは、ここで、わたしたちの使命は、自分のパンを分けてあげることだ、とは言っていないということです。わたしたち自身は、人にあげられるようなものは、何も持っていないからです。

わたしたちもまた、一人の物乞いなのです。その物乞いが、もう一人に、パンはどこで見つかるかを伝える。それが、伝道だ。教会の使命だ、というのです。

そして、その命を繋ぐパン、飢えを満たすパン、わたしを生かすパンこそ、イエスさま御自身であり、またイエスさまが成し遂げてくださった、救いの出来事なのです。

わたしたち自身もまた、飢えていたとき、教会を通して、先にパンをもらっている信仰の先輩を通して、美味しい命のパンがいただける場所を教えてもらい、それを受け取り、まさに生き返らされたのではなかったでしょうか。

そして、豊かに養われている今、今度は、わたしたちが、伝えていく番なのです。

<最も大切なこと>

さて、今日の新約聖書は、「コリントの信徒への手紙」を読んいただきましたが、これはまさに、パウロが人々に信仰のことを伝えている場面です。

注目したいのは、15:3 です。こうあります。「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。」

パウロもまた、最も大切なものを自分自身が受け取った。だから、それを、あなたがたに伝えたのだ、と言っています。この「最も大切なもの」こそ、命のパンであり、聖書で「福音」、「良い知らせ」と呼ばれていることです。

その内容は、続きにある通りです。「すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。」

これこそ、神の御子である、イエス・キリストが、わたしたちを救うために、成し遂げてくださったこと。神さまから、わたしたちに与えられたイエスさまと、その救いの出来事です。これが、パウロが最も大切に受け取り、また人々に伝えたことなのです。

…ですから、パウロが伝える「信仰」とは、人が何か勉強を究めて悟りに至ったり、修行を積み重ねて、何かを達成することで、手に入れるようなものではないのです。

人は、何かを成し遂げることによって救われるのではなく。神さまが、わたしたち人間を救うために、救いの御業を成し遂げてくださったことによって、救われます。

だからこれは、わたしたちにとっての「良い知らせ」、「福音」なのです。神さまによって、救いの恵みが、無償で、何の見返りもなく、目の前に差し出されている。そんな、驚くべき、素晴らしい、知らせなのです。

そして、それをただ信じ、感謝して受け取ることが、パウロが伝える「信仰」なのです。

さて、救いの御業を成し遂げられたイエスさまは、さらに、ケファ、つまりペトロに現れ、また十二人の使徒たちに現れました。さらに、イエスさまは、五百人以上の兄弟たちにも現れた。またヤコブにも、すべての使徒にも現れた。

これはつまり、イエスさまの御業を見聞きし体験した生き証人が、これだけいる、ということ。それは、イエスさまはまことにおられ、またイエスさまの御業が、この世でまことに起こった、真実の出来事である、ということ。す。

そして最後に、パウロは、このようなわたしにも、イエスさまは現れてくださった。こんなわたしのところにも、イエスさまは来てくださり、福音を差し出してくださった。このわたしにまで、イエスさまの救いの恵みが及んだ。そう語っているのです。

<証しと賛美>

さて、パウロは、恵みをいただいた時の自分のことを、「月足らずで生まれたようなわたし」と語り、自分の未熟さと、自ら犯してきた罪を告白しています。

9 節にはこうあります。「わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。」

…パウロは、使徒たちが、イエスさまの福音を宣べ伝え始め、教会が生まれていった当初は、それらの教会を激しく迫害する側の人間でした。パウロは、自分こそ正しいと信じて、自分こそ神さまの御心に従っていると信じて、イエスさまを信じる人々を迫害し、教会の人々を殺すことに加担していたのです。

でも、パウロは、イエスさまと出会いました。そして、パウロに神さまの御心を教え、正しく導いてくれる者も遣わされました。

そうしてパウロは、自分こそが、罪人であることを知らされた。イエスさまによって救いを与えてくださろうとする神さまの御心を、自分こそが無視し、自分こそが神さまに背いていたことに、気づかされたのです。

…しかも、そのパウロの罪は、自分が迫害し、目の敵にしていた、まさにそのイエスさまの十字架の死によって、贖われたということを知られました。

逆らい、背いていたその時から、ただただ、神さまの愛と憐みによって、パウロの罪は、イエスさまによって贖われ、赦されていたのです。

「神の恵みによって今日のわたしがあるのです。」

この神さまの恵みが、迫害者パウロを、福音の伝道者パウロに、まったく新しく変えてしまったのです。

今やパウロは、この自分の失敗を、神さまにとんでもない罪を犯してしまった黒歴史を、決して隠そうとはしません。普通は、自分の過去の罪や、大失敗は、あまり人に語りたくないものです。でもパウロはむしろ、どれほど自分が、神さまの御前に罪深かったか。どうしようもない罪人だったか。それを、包み隠さず語るのです。

なぜなら、パウロのどうしようもない罪の歴史は、その罪をも覆い尽くすことができ、赦すことができ、この罪人のパウロを、神さまの御心に生きる者として新しくして下さることがお出来になる、神さまの救いの恵みの歴史となったからです。

もはやパウロは、自分の罪の過去を恥じて、隠して、黙っているよりも。こんな自分にも与えられた「福音」を、感謝し、喜び、人に伝えずにはいられない。こんな自分をも救ってくださった神さまを、賛美せずにはいられない。そんな風になってしまったのです。

このように、自分が受けた「福音」と、このことによって自分にどれだけの恵みが与えられたかを証しすること。その喜びと、賛美を伝えること。いやむしろ、伝えずにはいられないこと。

それこそが、教会の伝道の業であり、わたしたちの信仰継承の業なのです。

<隠さずに>

さて、詩編 78：4 の、年間主題の聖句を、改めて見てみましょう。「子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう／主への賛美、主の御力を／主が成し遂げられた驚くべき御業を。」

「子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう」。面白い言葉です。

詩編 78 編は、全体で、神に選ばれたイスラエルの民の歴史を振り返っています。

しかし、これまで歩んできた祖から自分たちの世代の歴史は、子孫に隠したくなるような、後の世代に語り継ぎたくないような、そういう歴史だということです。

8 節にはこうありました。「先祖のように／頑な反抗の世代とならないように／心が確かに定まらない世代／神に不忠実な霊の世代とならないように。」

先祖の世代は、神さまに頑なに反抗する世代でした。また、「心が確かに定まらない世代」、つまり、神さまの方をまっすぐ向くことが出来ず、あちらこちらに心が浮ついている。他のものを神としたり、偶像礼拝をしたりするような世代でした。そして、神に不忠実な霊の世代。つまり、神さまとの約束を破るような、不誠実、不忠実な世代でした。

自分たちの先祖は、神さまに対して罪を犯してばかりの、どうしようもなく不信仰な、弱い、愚かな歩みをしてきたのです。

普通、わたしたちは、自分の先祖の英雄譚や、武勇伝や、どれだけ立派だったか、どれだけ頑張ってきたか、ということを知りたいし、語りたいものではないでしょうか。

でもここで語られていることは、まったく反対です。どれだけダメだったか。どれだけ神さまに背いたか。どれだけ酷い罪を犯したか。そのことが赤裸々に語られているのです。

そして、ここで語られていることは、イスラエルという一つの民のことだけではありません。すべての世代の、すべての国々の、すべての人間が。そして、今ここにいるわたしたちが。神さまの御前で、どれほど罪深いか。どれだけ反抗してきたか。どれだけ不誠実か。まさにそのことが、目の前に突きつけられているのです。

でも、それは、わたしたちを落ち込ませ、絶望させ、立ち上がれなくするためではありません。

まさに、このような罪にまみれた、どうしようもないわたしたちであるのに。それでもなお、見捨てないでいてくださる。それでもなお、救いの御手を差し伸べてくださる。それでもなお、愛し続けてくださる。聖書は、そのような神さまのお姿を、わたしたちにはっきりと見つめさせようとしているのです。

さんざん、イスラエルの先祖の罪を語った挙句、詩編 78 : 38 には、このような御言葉があります。「しかし、神は憐れみ深く、罪を贖われる。彼らを滅ぼすことなく、繰り返し怒りを静め／憤りを尽くされることはなかった。」

…民の情けない、罪深い、破れかぶれな罪の歴史は。それでも見捨てず、救い出し、生かし、導いてきてくださった、神さまの愛と、憐れみと、赦しの歴史に、他ならないのです。

<謎>

78 : 2 にはこうありました。

「わたしは口を開いて箴言を／いにしえからの言い伝えを告げよう」。

ここには、「いにしえからの言い伝え」とありますが、この「言い伝え」という言葉は、本来の意味は、「謎」とか、「神秘」という意味です。

詩人は、いにしえからの「謎」を告げよう、と言っているのです。

確かに、これほど罪深い民を、どうして神さまはお見捨てにならないのか。どうして赦してくださるのか。どうしてそこまで憐れんでくださるのか。どうしていつまでも、どこまでも、共にいてくださるのか。それは、驚くべきことであり、わたしたちの理解を超えていることであり、もはや「謎」以外の何物でもありません。

そして、わたしたちにとって、最も大きな「謎」こそ、パウロが「最も大切なこと」として語ったこと。つまり、神の御子が、まことの人となってへりくだり、すべての罪人の罪を背負って十字架に架かり、何の見返りも必要なく、罪の赦しを与えてくださったこと。そして、復活し、わたしたちに神の子の身分と、永遠の命と、復活の約束を与えてくださったことなのです。

神の御子が、罪人のために、命を捨ててくださる。これほどの「謎」があるのでしょうか。罪人のわたしたちが、神の子とされ、死から復活する者とされる。こんな「神秘」があるのでしょうか。

なぜ、神さまは、罪を犯したわたしたちのために、背き、逆らった、不忠実なわたしたちのために、これほどまでのことをしてくださるのでしょうか。

なぜ、神さまに背き、神さまを捨て去ったようなわたしたちと、神さまは、いつまでも、どこまでも、共にいようとしてくださるのでしょうか。

…神さまは、その理由を、わたしたちを愛しているからだ、と告げて下さいます。

この、神さまの愛こそ、まことに「神秘」です。そして、この愛こそ「真実」です。

この愛のゆえに神さまは、わたしたちを罪から救い、生かし、共に生きる者とするためなら、愛の全能の御力で、何でもしてくださる。わたしたちへの愛のゆえに、神の御子が十字架に架かって、死ぬことさえ、お出来になるのです。

わたしたちはそのことに、ただただ驚くばかりです。

<救いの歴史は続く>

しかし、まさにそうして、イスラエルの罪は贖われ、パウロの罪は贖われ、そして、わたしたちの罪は、贖われたのです。わたしたちの罪の歴史は、そうしてイエスさまによって、神さまの救いの歴史、愛の歴史とされてきたのです。

そしてイエスさまの福音は、まだこれからも、地の果てに至るまで、終わりの日まで、すべての人々の罪を覆っていきます。神さまの救いの歴史は、これからも続いていきます。

だから、わたしたちは、「主への賛美、主の御力を／主が成し遂げられた驚くべき御業を。」子孫に隠さず、後の世代に語り継いでいきたいのです。愛する家族に、大切な友に、また苦しみ悩みにある隣人に、一刻も早く、この愛を、救いを、知ってもらいたいのです。

そのためには、別に、自分の失敗談や、ダメなことを、無理やり語る必要はありません。

でも、信仰のことを伝えようとして、わたしたちは、自分の立派さや、頑張りや、良いところを見せる必要は、全くないのです。むしろ、そのようなことを語るのは、本当の信仰ではありません。

信仰とは、神さまが成し遂げてくださった救いの御業を、信じ、依り頼むことだからです。イエスさまが成し遂げてくださった救いを、ただ感謝して、受け取ることだからです。

わたしたちの救いは、ただ神さまの愛によって、ただ神さまの憐みによって、ただ神さまの忍耐によって、与えられています。

このような罪人のわたしを、それでも赦してくださる。このような弱いわたしを、それでも愛してくださる。このような貧しいわたしを、それでも受け入れてくださる。

この神さまを、わたしたちが心からほめたたえ、共に礼拝をささげていること。

また、喜びの時には神さまに感謝し、悲しみの時には神さまに寄り縋り、苦難の時には神さまに救いを求めていること。

そんな、神さまに向かうわたしたちの姿が、神さまと共にあって生かされている姿が、神さまの恵みを語り継ぐものとなり、ここに命のパンがあることを伝えることになり、信仰の継承となっていくのです。

【お祈り】

天におられるわたしたちの父なる神さま、御名をほめたたえます。

あなたが御子イエスさまによって成し遂げてくださった驚くべき御業を、わたしたちは知らされています。その御業の恵みを、まさに今も、この身に受けています。

どうか、この感謝と喜びを、隣人に現わすことが出来ますように。どこまでもわたしたちを愛してくださるあなたのことを、語り継いでいくことが出来ますように。

そして、イエスさまがその恵みへと、一人でも多くの者を捕らえてくださり、あなたをほめたたえる群れが、この地にあって、ますます増し加えられていきますように。

宮崎の地で、共にあなたを賛美して歩む、都城城南教会、宮崎中部教会の信仰の交わりを感謝いたします。どうかこれからも、いよいよ歩みを祝福してください。

わたしたちの主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌 21】 4 0 2 「いともとうとき」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン